様式第5号（第9条関係）

論 文 内 容 の 要 旨

報告番号		氏　名	蓮川 昭仁
Surgical effects of type-I thyroplasty and fat injection laryngoplasty on voice recovery 甲状軟骨形成術Ⅰ型と声帯内自家脂肪注入術との治療成績の検討			

論文内容の要旨

目的:甲状軟骨形成術Ⅰ型（以下Ⅰ型）と声帯内自家脂肪注入術（以下注入術）は一側性声帯麻痺に対する代表的な治療法である。アプローチに違いはあるものの、共に声帯を正中に移動することで声門閉鎖を完成させることを目的とする手術である。本研究では一側性声帯麻痺に対して声帯内方移動術を施行した症例について、術式によるそれぞれの治療成績について比較、検討することを目的とした。

方法:2009年1月から2013年2月の期間に大阪回生病院大阪ボイスセンターを受診した375例の一側性声帯麻痺症例のうち、135例が音声改善手術を施行された。それらのうち、声帯のレベル差がない症例に対してⅠ型若しくは注入術が80例に施行された。そのうち音声改善手術を術前に施行しておらず、術前後において術前と手術後約一か月の機能的検査結果が比較可能であった43例を本研究の対象とした（Ⅰ型12例、注入術31例）。手術効果は術前、術後約一か月、そして術後約六か月の最長発声持続時間（MPT : maximum phonation time）、周期変動指数（PPQ : pitch period perturbation quotient）、振幅変動指数（APQ : amplitude perturbation quotient）、そして調波成分と雑音成分のエネルギー比（HNR : harmonic to noise ratio）を比較することによって行った。

結果:術前と術後一か月の値を比較すると、Ⅰ型及び注入術は共にMPT（Ⅰ型, P=0.005; 注入術, P<0.001）、PPQ（Ⅰ型, P=0.047; 注入術, P=0.041）において有意な改善を認めた。また術式間で改善度を比較したが有意な差は認めなかった。またⅠ型の術後六か月におけるMPT、APQ、HNRは術後一か月の結果と比べ増悪する傾向を示したものの、注入術においてはMPTが術後一か月から六か月の間でわずかに減少したのみであった。

結論:Ⅰ型及び注入術は共に一側性声帯麻痺症例の音声改善に効果的であった。また術後一か月時点での術式間の有意差は認めず、術後六か月時点では注入術がより良い効果を示している可能性が示唆された。